隠国KOMORIKU通信 Vol. 11
The Letters From K.Kayamori in KOMORIKU.

理屈っぽい人って、嫌われますよ！

2019.7.28

先日、あるグループの若いメンバーとこんな話をした。「理屈っぽい人って、嫌われますよ！そもそも話なんて聞いてないですから！」なかなか辛辣である。年齢が進むにつれて理屈っぽくなり、頑固になっていくとよく言われるが、心に留めておかなければならない。

音楽は感性？

音楽を含む芸術においては、感性がものをいう。感性で勝負しているとも言える。そのように自負している人も多いだろう。ところが、芸術においても、これまでに幾多の人が見つけてきた技術やそういったものがより体系化された理論があって、芸術の知的側面を形づくっている。例をあげると、歌を歌うには発声法があり、曲を作るには作曲法がある。それらを学ぶことによって、芸術の歴史をも享受し、より立体的に音楽を捉えることができるというわけだ。クラシカルな音楽は知性と感性のバランスによって成り立っていると思うが、音楽の中でも合唱の世界は、他の音楽に比べて、知性がやや強いと思うことがある。それは合唱には言葉があるからだと考えている。その言葉とはほとんどの場合が、文学的な奥行きのある詩である。それこそが、合唱の特徴であるのだ。

指揮者は何をしているのか

よく「指揮者って何をやってるんですか？」とたずねられる。わが義兄などは「あれは歌や楽器がどうしようもないやつが前に立たされてるんやろ？」と言ってのける。そういう側面もあるのかもしれない。明確に否定しきれないところにこの「指揮をする」ということの得体の知れないうさんくささがあるのかもしれない。「指揮者って何をやってるんですか？」という問いに対する少し建設的な答えとして、「練習をして、本番も振る」もある。見える部分としてはいい答えだろう。実は指揮者の仕事の大部分は総譜（スコア）や楽譜を読むことである。というと、手を振る練習はしないのか？と訝られるかもしれないが、手を振る練習などはほとんどしない。手を振るトレーニングはとっくの昔に終わっていなければならないのだ。つまり、自然に心に描く音楽を手の動きで表すことができなくてはならないのだ。心に音楽を描けるようにひたすら楽譜を読んで、作曲家が何をこの曲で表しているのか？この音、ハーモニー、フレーズは何を表しているのかをつかみとろうとする。そして、楽譜という設計図に書かれた音楽をわかった上で、リハーサルで演奏者にそれを伝え、具体的に曲づくりを進めて本番の演奏を迎えるのだ。楽譜を読み解く時には、作曲上の理屈や作曲家の哲学にアプローチしなければならず、単に楽譜を読むだけではなくて、その意味を探っていくのだ。小説を読むことにたとえてみれば、単に文字が解ってるだけではその小説を味わえないのと同じだ。漢字も知ってなくてはならないし、文章や段落のまとまりのあるものも解った上で、登場人物の性格や、もっと言えば、その小説が何を言いたかったのかをわからなければならない。小説の中にある、香り立つような表現や迫り来るような迫力もわかっていたい。そんなものを読み解いていくには、知識だけではなくて、理屈や理論のようなものが必要となってくる。もちろん感性もだ。指揮者というのはこのある意味ちまちまとしたような楽譜を読むという作業を重ねて、リハーサルの現場に臨むのである。

音楽づくりの現場では・・・

ところが、リハーサルの現場、つまり音楽作りの現場では、往々にして、理屈っぽいのは嫌がれるのだ。冒頭の「理屈っぽい人って、嫌われますよ！」なのである。音楽作りの現場ではむしろ、コミュニケーション力やプレゼンテーション力など総合的な人間力がものをいう。心に描いた音楽をどう伝えて、どう実現するのか。学びつつ、新しいものを作り出していく場の雰囲気を作り、楽しみながら、生き生きと一人一人が関われる場を作ることが大切だ。そのためには、どんなふうにやり取りをしていくのかということが、とても重要になる。究極の人間関係なのかもしれない。まさに人間力で勝負するのだ。リハーサルの後は楽譜をみながら、今日のリハーサルはどうだったのかを振り返り、まだ不十分な箇所をチェックして次回に臨むのである。こんなことの繰り返しを延々とやっているのだ。つまり、指揮者は研究者のような面と、現場監督の職人的な面とをもっているのだ。もちろん、演奏する側も、演奏するために音に向かい合いしっかりと音楽を把握した上で、アンサンブル練習に臨む。あるべきフレーズは？ハーモニーは？をともに演奏する仲間と模索していくのである。そして、指揮者との練習に至るのである。1人では作ることができないハーモニーや仲間の音楽に出会う喜びもアンサンブルの魅力なのだ。

第12回定期演奏会「アカペラ エンカ」

そんなやりとりをしながら作り上げてきた合唱団Rinte第12回定期演奏会「アカペラ エンカ」は、前回演奏会に引き続きオールアカペラプログラムだ。声だけで作るハーモニーの世界をお楽しみいただきたい。このコンサートのテーマは「昭和」、そして、外国語の作品はイスパニアに光をあてた。昭和の名曲、そして昭和的なものとイスパニア（スペイン）を串刺しにするものは「情熱」であり、「愛」だ。イスパニアはスペインのことだが、スペインの人たちは自分たちの国をイスパニア、そして、自身のことをイスパニョールという。闘牛に見られるようにまさに情熱の国だが、今回取り上げたルネサンス後期の巨匠ヴィクトリアも現代のバスクの作曲家ブストもその作品は神への愛に満ち溢れている。なんとも情熱的だ。「風紋」も「エンカ」も、そして、「昭和の名曲集」もとにかく熱い。「エンカ」も含めて、どの曲も不条理・不合理に対する憤りだったり、どうにもならないことに対する嘆きだったり、ねがいだったり・・・、そんな思いが曲からあふれてくる。最近の作品のような「おしゃれ」感や「さらっと」感はなく、濃厚で、ストレートで、ひたむきなのだ。もちろん、懐古趣味でこれらの「熱い」歌を歌うのではないのだ。

合唱だけが届けることのできる幸せや感動を

最近よく思うのだが、合唱という音楽だけが届けることのできる幸せや感動がきっとある。確かな支持や評価を得て行くには、やはりアンサンブルや音楽の本質を磨かなければならないと強く思う。

これほど、理屈を並べたらもう充分にうんざりされているだろう。ここでもあくまでも熱く、ちょっと拳をつくって、昭和風に書いてみた。

ボク？もちろん、昭和生まれである。

◆ご感想などは komoriku.nabari@gmail.com まで